

幽靈瀧の傳説

伯耆の國、黒坂村の近くに、一條すぢの瀧がある。幽靈瀧と云ふその名の由來を私は知らない。瀧の側に瀧大明神と云ふ氏神の小さい社があつて、社の前に小さい賽銭箱がある。その賽銭箱について物語がある。

今より三十五年前、或冬の寒い晩、黒坂の麻取場に使はれて居る娘や女房達が一日の仕事を終つたあとで爐のまはりに集つて、怪談に興じてゐた。はなしが十餘りも出た頃には大概のものはなんだか薄氣味悪くなつてゐた。その時その氣味悪さの快感を一層高めるつもりで、一人の娘が、『今夜あの幽靈瀧へひとりで行つて見たらどうでせう』と云ひ出した。この思ひつきを聞いて一同は思はずわつと叫んだが、また續いて神經的にどつと笑ひ出した。……そのうちの一人は嘲るやうに、『私は今夜取つた麻をその人に皆上げる』と云つた。『私も上げる』『私も』と云ふ人が續いて出て來た。四番目の人は『皆賛成』と云ひ切つた。……その時安本お勝と云ふ大工の女房が立ち上つた。——この人は二つになる一人息子を暖かさうに包んで、背中に寝かせてゐた。『皆さん、本當に皆さんが今日取つた麻を皆私に下さるなら、私幽靈瀧に行きます』と云つた。その

申出は驚きと侮りとを以て迎へられた。しかし、度々くりかへされたので一同本氣になつた。麻取りの人達は、もしお勝が幽霊瀧に行くやうなら其日の分の麻を上げると、銘々くりかへして云つた。『でもお勝さんが本當にそこへ行くかどうか、どうして分ります』と鋭い聲で云つたものがあつた。一人のお婆さんが『さあ、それなら賽銭箱をもつて来て貰ひませう、それが何よりの證據になります』と答へた。お勝は『もつて來ます』と云つた。それから眠つたこともを背負つたまま戸外へ飛び出した。

その夜は寒かつたが、晴れてゐた。人通りのない往來をお勝は急いだ。身を切るやうな寒さのために往來の戸はかたく閉ざしてあつた。村を離れて、淋しい道を——ピチャピチャ——走つた。左右は静かな一面に氷つた田、道を照らすものは星ばかり。三十分程その道をたどつてから、崖の下へ曲り下つて行く狭い道へ折れた。進むに隨つて路は益々悪く益々暗くなつたが、彼女はよく知つてゐた。やがて瀧の鈍いうなりが聞えて來た。もう少し行くと路は廣い谷になつて、そこで鈍いうなりが急に高い叫びになつて居る、さうして彼女の前の一面の暗黒のうちに、瀧が長く、ぼんやり光つて見える。かすかに社と、それから、賽銭箱が見える。彼女は走り寄つて、——それに手をかけた。……

『おい、お勝』不意に、とどろく水の上で警戒の聲がした。

お勝は恐怖のためにしびれて——立ちすくんだ。

『おい、お勝』再びその聲は響いた、——今度はその音調はもつと威嚇的であつた。

しかしお勝は元來大膽な女であつた。直ちに我にかへつて、賽錢箱を引つさらつて驅け出した。往來へ出るまでは、彼女を恐がらせるものをそれ以上何も見も聞きもしなかつた、そこまで来て足を止めてほつと一息ついた。それから休まず——ピチャピチャ——驅け出して、黒坂村について麻取場の戸をばげしくたたいた。

息をきらして、賽錢箱をもつてお勝が入つて來た時、女房や娘達はどんなに叫んだらう。彼等は息をとめて話を聞いた。幽靈瀧から二度まで名を呼んだ何者かの聲の話をした時に彼等は同情の叫びをあげた。……何と云ふ女だらう。剛膽なお勝さん。……麻を皆上げるだけの値打は充分にある。……『でもお勝さん、さぞ赤ちやんは寒かつたでせう』お婆さんは云つた、『もつと火の側へつれて來ませう』

『おなかがあいたらうね』母親は云つた『すぐお乳を上げますよ』……『かはいさうにお勝さん』お婆さんはこどもを包んであるはんでんを解く手傳をしながら云つた——『おや、背中がすつかりぬれてゐますよ』それからこの助手はしやがれ聲で叫んだ『ア、血が』

解いたはんでんの中から床に落ちたものは、血にしみたこどもの着物で、そこから出て居るものは、二本の大層小さな足とそれから二本の大層小さな手——ただそれだけ。

こどもの頭はもぎ取られてゐた。……

(田部隆次譯)

The Legend of Yurri-Daki. (Koto.)